大分県新長期総合計画策定県民会議　第２回未来創造部会　委員発言要旨

日時：令和５年11月６日(月)10:00～12:05
場所：トキハ会館 ５階 カトレアの間

No.	項目	発言要旨
1	未来創造１（１） 交通	・東九州自動車道４車線化、中九州横断道路や中津日田道路等の整備促進については、全面的に賛同する。とりわけ、中九州横断道路は早急な整備が必要と考える。ＴＳＭＣの立地で湧きたつ熊本県での経済活性化が隣県の大分県に波及するか否かは、ひとえに中九州横断道路の早急な整備如何である。 ・豊後伊予連絡道路など新たな国土軸の形成等については、県民の理解が不可欠である。今後は、若い人たちを巻き込んだ民主導型のフォーラムやシンポジウムを活発に実施することで県民世論の醸成が必要と考える。
2	未来創造１（１） 交通	・物流面では、東九州道の片側１車線の区間は狭く走りづらく、制限速度も70キロ区間が多いため、南九州からのトラック輸送が、片側２車線で制限速度80キロの九州自動車道を介した福岡経由の陸送や、門司からのフェリールートに流れている。 ・無料の中九州横断道路については、新たな九州の物流の大動脈に間違いなくなるため、物流や経済活性化に向けて、完成時期を早めることは不可欠である。
3	未来創造１（１）（２） 交通	・先月、北欧４か国のフェリー会社を視察したが、旅客サービスは10年先を行き、どの航路も大変人気があり、海上輸送が重宝されていた。物流面においても、鉄道と連結したレール＆シップの輸送体制が充実しており、船が欠くことのできない輸送手段として定着していた。 ・豊後伊予連絡道路が開通した場合、直下のフェリー航路は廃業する可能性がある。モーダルシフトの担い手であり、トラックドライバー不足の解消にも資する船会社との対話を行いながら、共存・共栄できる仕組みを検討していただきたい。
4	未来創造１（１）（３） 交通	・今後マイカーのＥＶ普及が進むことから、特に中九州横断道路等の主要拠点でのＥＶ充電設備の整備充実が課題になると考える。ＥＶの充電設備がないところは、県外の観光客からも敬遠されると思うので、対策が必要である。
5	未来創造１（１）（２） 交通	・豊後伊予連絡道路の開通や東九州新幹線と四国新幹線が繋がった場合に、フェリー利用者は減ると思うので、四国との連携を道路等でアピールするのであれば、海上交通についてはトーンダウンするなど、メリハリを付けることも必要ではないか。 ・東九州自動車道の４車線化や中九州横断道路の整備促進については、早急に進めるべきである。
6	未来創造１（１） 交通	・「10年後の目指す姿」や「現状と課題」については、時系列や施策の優先順位等を勘案して並び順を整理すべきである。 ・自動運転については、先行して取組を進めている大分市との連携についても記載していただきたい。
7	未来創造１（２） 交通	・フェリーターミナルの再編について、別府港をにぎわい溢れる港へ整備することが重要であると考える。周辺のバス停について分かりやすく周知するなど、二次交通の整理も課題である。
8	未来創造１（２） 交通	・現在、北九州空港を発着する国際貨物定期便が就航しているが、同様に大分空港を物流港として利活用する視点も持つべきではないか。

No.	項目	発言要旨
9	未来創造１（２） 交通	・大分空港の活用について、宇宙港に関する記載がないことに違和感を感じる。10年後に大分空港を活用した宇宙往還機ができるようになると、観光振興の面では非常に大きいキラーコンテンツになると考える。そういった観点からも10年後を考えて良いのではないか。
10	未来創造１（３） 交通	・10年後には、次世代空モビリティが都市部の一部において実用化されている可能性がある。そのため、本施策でも、次世代空モビリティについて少し道筋を描いておく必要があるのではないか。 ・例えば、eVTOLの活用により、近距離の移動サービスが提供できれば、都市部の渋滞解消につながるのはもちろんのこと、CO2の排出削減にも寄与するため、持続可能な交通ネットワークが形成されると思われる。目指す姿を実現するために必要な取組に、これらの表現を組み入れることを提案する。
11	未来創造１（３） 交通	・県民意識調査や高校生アンケートについて、広域交通網だけでなく、バス等の生活交通をしっかりしてほしいという声が多いことに着目すべきである。 ・地域の公共交通をもっと大事にすべき。県の地域公共交通計画の要素も入っていないため、大きな話だけでなく足下を固めることをしっかり記載していただきたい。また、デマンドタクシーやライドシェアの話の前に、まずは、交通事業者の人員確保や公共交通の利用者を増やすなどの内容を記載すべきではないか。
12	未来創造１（３） 交通	・「10年後の目指す姿」について、夢がない、イメージが湧かない部分がある。交通ネットワークの部分だと、大阪・関西万博で空飛ぶクルマが人を運ぶようになる中、今でいう先端技術が10年後にはもっと普通になっていると考える。そうした観点から、空飛ぶクルマやドローンなど先端技術の活用を盛り込み、10年後の姿をイメージしても良いのではないか。
13	未来創造１（４） 企業立地	・企業誘致が重要である一方、地場企業に対する支援において、労働集約型の企業は設備投資の割合が大きくないため、支援要件を満たさないケースが多い。前向きな投資であれば規模等にかかわらず、支援が受けられる体制づくりをお願いしたい。 ・工業適地の確保については、半導体をはじめとする企業が投資のタイミングを逸しないよう、周辺道路の整備や造成を急ぐべきである。また、自治体が所有する工業用地をまとめて分かりやすく情報提供することも重要である。
14	未来創造２（１） 移住定住	・テレワークの活用は、移住のみならず定住や再就職にも有効だという視点を持っていただきたい。企業のテレワーカー活用を促進し、雇用の受け皿づくりを進めるべきである。そのためには、テレワークによる働き方そのものを効率的なものにするとともに、スキルや人間関係がない状態からでも、仲間意識や愛社精神を持ちながら働ける仕組みに進化させなければならない。 ・テレワークを活用して、大分に住みながら東京の会社に就職できる姿が実現すれば、若者が持つ「大分への愛着」と「都会への憧れ」を両立できるのではないか。
15	未来創造２（１） 移住定住	・大分は暮らしやすく働きやすい、とても良いところだということをもっと発信してはどうか。特に、人口減少が顕著な20～39歳の若年層や高校生、大学生に向けて発信する必要があると考える。 ・個人的には、都会と比べ生活費が格段に安く、給料がそんなに高くなくても生活水準が高いのが大分の特長だと思っている。また、通勤ラッシュなど都会で感じるようなストレスがほぼなく、ＱＯＬが非常に高い。その上で、やりがいのある仕事がたくさんある。子育てにも不満はなく、病院の体制も問題ないと思っている。 このような魅力があまり移住者に知られていない、届いていないと思う。
16	未来創造２（１） 移住定住	・ここ数年、県外のスタートアップの企業が大分県を選んで二拠点で活動する事例が増えていると感じる。特に、女性が大分の住みやすさを感じてくれているようだ。競争相手が多い関東・関西に比べ、大分であれば成長しやすいという側面もある。 ・進出したスタートアップは、関東・関西の情報を県内の起業家に還元してくれるため、コミュニティの意識や視座も高くなる。誘致に力を入れていただきたい。

No.	項目	発言要旨
17	未来創造２（１） 移住定住	・人材確保の観点では、高校生や大学生がどれだけ県内で就職してくれるかが鍵を握る。県内の学生の定着や、他県から大分県に学びに来てそのまま就職していただくためには、希望する職種について学べる機会の確保が重要である。
18	未来創造２（２） ﾈｯﾄﾜｰｸ・ｺﾐｭﾆﾃｨ	・「住み慣れた地域で住み続けたい」という住民ニーズを踏まえながらも、利便性の向上等の観点から都市の中心部に誘導することも検討すべきかという論点が投げかけられているが、非常に難しい論点だと思っている。 ・経済的な観点だけをみると、インフラの整備や公共サービス等の維持は切り捨てられがちだが、なんとか地域が存続するかたちを模索していただきたい。相反する視点をいかにバランスをとってまとめていくかが重要である。
19	未来創造３（１） ｶｰﾎﾞﾝﾆｭｰﾄﾗﾙ	・カーボンニュートラルの推進は、大分県が持つ森林をはじめとする資源の価値が大きく見直され、地域にお金が落ちる、新たな雇用が生まれる可能性を秘めている。 ・環境と経済の両立をできるだけ打ち出して、地域の若者等に新たな仕事を生み出すべきである。また、ドローンを駆使した森林の資源量・吸収源の把握については、大分県がリードする部分だと思うので、「環境先進県」の旗印の下、引き続き進めていただきたい。
20	未来創造３（１） ｶｰﾎﾞﾝﾆｭｰﾄﾗﾙ	・温室効果ガスの排出抑制に、公共交通を利用する、自家用車から転換するという観点を追加いただきたい。物流のモーダルシフト等も温室効果ガスの排出削減に寄与するので、そういった観点も含めて幅広に展開すべきである。
21	未来創造３（１） ｶｰﾎﾞﾝﾆｭｰﾄﾗﾙ	・環境先進県を目指すという視点に強く賛同するとともに、それがブランド力の向上につながる考える。県民意識調査や高校生アンケートでも、環境が良いという点は非常に強い支持をいただいており、大きな魅力になっていると認識している。 ・現在、生物多様性条約の中でもネイチャーポジティブの取組が強化されており、企業においても取組が求められている状況にある。自然豊かな大分県において、生物多様性の増加を見据えたかたちで取組を進め、県民の生活環境の改善とともに、産業分野でも新たなビジネスチャンスにつなげることが重要である。
22	未来創造３（２） ｶｰﾎﾞﾝﾆｭｰﾄﾗﾙ	・今後のトランジションを見据えたときに、新たなビジネスと既存ビジネスとの連携がポイントになってくる。そうした視点で行政のサポートをいただきたい。 ・経済と環境の両立という観点では、カーボンニュートラルという新たな価値観を県民に広く意識付けし、啓蒙していく必要がある。コストがかかるカーボンニュートラルの需要を喚起し、企業はその需要を取り込んで供給していくといった好循環を生み出すことが重要である。
23	未来創造４（１） ＤＸ	・日本は一人当たりＧＤＰが世界12位であり、労働生産性が低い。従来の仕事の仕組みのままでは、いくら人を呼び込んでも人手が足りなくなる。自動化により生産性や付加価値を高めながら、県経済を発展させていくことが重要である。
24	未来創造４（１） ＤＸ	・県内企業では、ＤＸに必要な社内のネットワーク環境があまり整備されていない。企業がＤＸの恩恵を受けることができるよう、今後は、公共のデジタルインフラのみならず、企業の社内インフラの整備に向けたきめ細かな支援が必要と考える。
25	未来創造５（１）～（３） 教育	・遠隔授業などＩＣＴを活用した学校現場の取組を進めるためには、現状の教職員では対応が難しいことから、教員の人材育成が必要である。

No.	項目	発言要旨
26	未来創造５（１） 教育	・教員数が減少する中で、どの地域に住んでいても、こどもが希望する教育を受けられる環境づくりが一層重要となる。こどもの数が少なくなっていくからこそ、こどもの学びの機会を確保し、大切に育てていかなければならない。
27	未来創造５（２） 教育	・プログラミング教育は、論理的思考を身につける上でも重要である。大分県の小学生プログラマーは、全国５千人以上の中から３年連続でトップ10に選出されるなど、着実に実績があがっている。 ・大分県の未来を担うこどもたちには、自分の考えたことを相手にしっかりと伝える力を身につけてほしい。技術的なインプットだけではなく、自分がどのように考えてプログラムを作ったかなどを発表する場を創出していくべきではないか。
28	未来創造５（２） 教育	・教育分野では、本県の多文化共生の特長を活かせていないと感じる。大分にはAPUがあり、世界100カ国以上の方が本県で生活している。そうした大分県ならではの強みを教育分野に活かすことで、こどものグローバルな視点で物事を見る力が育成されるのではないかと考える。
29	未来創造５（２） 教育	・県内では、多文化に触れる機会がありながら、海外と関わる仕事に就いてみたいと思うこどもが少ない状況にある。大分で育つこどもが、世界に目を向けて、大分に居ながら海外との仕事ができる環境を創出することも大事。そうしたロールモデルを見せていくことが必要ではないか。
30	未来創造５（３） 教育	・自身が経営する会社の採用面接で、「こどもが発達障がいの診断を受けたので療育のために月に１回会社を休む必要がある」といった相談が増えている。 ・発達障がいの診断を受けたこどもは、予算や人員の都合により、学校で十分な支援が受けられない現状もあると聞くので、合理的な配慮を受けられる体制づくりをお願いしたい。
31	未来創造５（３） 教育	・不登校のこどもが増加している中、10年後の姿としては、不登校のこどもが減っているべきである。不登校の要因は様々だが、その要因をしっかりと掘り下げ、安心して学校教育が受けられる環境をつくっていくことを明確に打ち出すべきである。 ・県立高校では別室で授業が受けられる環境が整っていないと聞くので、そうした方策も含め、まだまだ打てる策があるのではないかと思う。
32	未来創造５（４） 教育	・世の中が変化する中で、進路指導のあり方も変わる必要があると思う。大分に残りたいというこどもに対する県内大学への進学指導など、こどもが希望する進路に寄り添い、サポートする観点が重要である。優秀な人材が大分に残り、大分県を盛り上げていこうという目標のもと、若い世代を育てていく視点も大事だと考える。
33	未来創造５（１）（２）（５） 教育	・県内大学への進学を促進するには、小・中・高それぞれの課程で、こどもが大分の良さを知る機会を増やすべきではないか。また、地域の人との交流により、大分の良さを知ることもあると思うので、地域コミュニティの中でこどもを育てていく観点を持ちながら、小学校から大学までの各機関が連携することも必要だと考える。
34	未来創造５（６） 教育	・児童数が減少する中で、こどもだけでなく、多様な方々に学びの機会を提供するリカレント教育が重要になってくる。技術の進歩や産業の発展、交通の発展など様々な分野との関連を見据えていきながら、あらゆる世代に多様な学びの機会を提供する施策が必要ではないか。
35	未来創造５ 教育	・教育について、少し短期的な取組になっている印象を受ける。技術革新や社会環境の変化を見据え、「10年後のこどもたちがどういう世界に生きているのか」を想定するなど、長期的な視点が必要ではないかと考える。